

# なごみだより

平成21年12月5日発行 第9号  
犯罪被害者自助グループ「なごみ」の会

問い合わせ先 鳥取県庁くらしの安心推進課  
TEL 0857-26-7183

## 講演を通して思うこと

犯罪被害者の立場から、講演をさせていただく機会がある。その度に、心身共に疲労困憊してしまう。自らの苦悩の体験を振り返り、理路整然と聴衆を前に話すことなど不可能である。講演後、「遺族の方も笑ったり、楽しんだりするのですね」とか「特別視してはいけないのですか」と至極当然のことを言われたり、「お仕事は?」「ご結婚は?」とお決まりのように聞かれる。無職独身といった駄目人間のレッテルを貼られたようで自分を卑下してしまう。私の講演内容が拙いからかもしれないが、仕事や結婚が出来るような状況ではないことがどうして理解してもらえないのか、講演中鳴り響く携帯電話に出る方や、講演する私の目前に来て煌々とフラッシュをたき撮影する記者の存在が信じがたい。涙など流していないのにもかかわらず「涙ながらに語った」といった常套句が記事にされる。

私達犯罪被害者は、大学教授でもコメンテーターでもなく、講演を生業としてしているのではない。重いテーマを受け入れてもらう為に、細心の注意を払う。たった1回の講演にどれほどのエネルギーを費やしていることであろう。講演後、救急搬送された方もいる。ならばなぜ講演を続けるのか。壇上に立つのは、救えなかった命、守れなかった命に対する贖罪の念と、最愛の家族が生きた証、最愛の家族との絆を感じたいからにほかならない。

11月中旬に事故が起きた福島県で計4回の講演を行った。3年3ヶ月ぶりに訪れること、事故後乗り物への恐怖が顕著であったこと、色々な思いが去来してかなりの決心を要した。しかも講演4回のうち3回は小学生、中学生対象のものであった。中学生ならまだしも、小学生しかも低学年にどう話せば伝わるのか考えがまとまらなかった。ふと立ち寄った書店で目についたのが高橋源一郎著『13日間で「名文」を書けるようになる方法』という本であった。立ち読み程度で恐縮ではあるが、小学生の書く文は、衝撃が走るほど名文ばかりであるが、中学生になるとその文は凄みを無くすというのだ。これは、教育という紋切り型システムによる「言葉の私性」の喪失だと記されていた。「私」から発しないと、机上の空論、「涙ながらに語った」といった常套句の記事と同等レベルであり、人の心に響かないと感じた。子ども達の前で、自分の言葉を大切に話をしようと思った。心がけた。

講演後、質問と感想を求めた司会者に対し、さっと数人手が挙がった。こんなことは初めてであった。「30名の担任をしていますが、30人の命の輝きを大切にしたいと思います」と熱く語った先生をはじめ、小学生が発する言葉はずっしりと重みがあり、きらきらと輝いた瞳をしていた。私の心配をよそに、小学生はきちんと私の言葉を受け止めていた。

「今日帰ったら、弟をぎゅっと抱きしめてあげたいと思います」こう語った男子の姿を見て、ほっと私は笑顔になった。講演をして、壇上で笑顔になったことなどなかった。心の底から笑顔になれたことで講演をして良かったと初めて思えた。マスコミが作り出している「悲哀と怒りの中にいる犯罪被害者像」にあって、笑顔が記事となったのはそうあることではない。と同時に、こんな子ども達から犯罪は生まれぬ、大人や社会の責任を痛切に感じ取った瞬間であった。

(米原美由紀)

09年11月17日 朝日新聞 福島版

# どれほど残酷で 大きな悲しみか

## 磐越道バス事故 父妹失った米原さん

05年4月、猪苗代町の磐越道で起きた高速バスの事故で父と妹を失った米原美由紀さん(36)は鳥取県米子市に16日、3年半ぶりに福島を訪れ、初めて子どもたちに事故のこと、失った家族のこと、大事に生きてほしい命のことを語った。「この世の中に安全の花が咲き誇り、悲劇が繰り返されないことを希望します」。集まった子どもたちの心に、米原さんの言葉が静かにしみこんだ。

(斎藤健一郎)

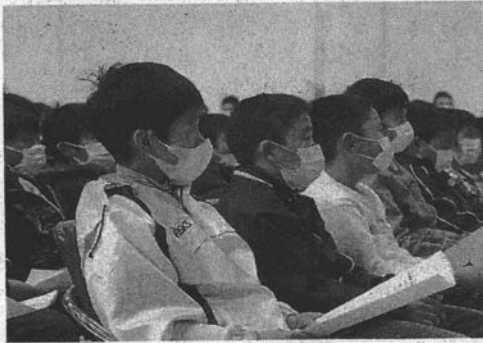
## 鯨 児童前に語る

鯨川村の公民館講堂。村内2小学校から集まった子どもたちの表情は真剣だった。「いのちと絆をみつめて」と題した米原さんの話は、4年前の事故から始まった。

「猪苗代湖近くの磐越道で、大阪から仙台に向かっていたバスが横転しました。鳥取県になかった被害者支援センターの立ち上げに協力するなど、活動を続けてきた。だが、子どもに話すのは初め

今年4月11日、意識の戻らぬまま息を引き取りました」妹を看病していた2年前から、米原さんは被害者の集まりや警察などで体験を語り、

子どもたちに話しかける米原美由紀さん(左)と真剣な表情で米原さんの話を聴く鯨川村の小学生たち(いずれも鯨川村)



で、重い内容をどうわかりやすく伝えるか、ぎりぎりまで悩んで壇上に立っていた。

「妹が亡くなる直前に、お父さんとお父さんが待っているからね」と声をかけるのと、口をへんの字にして、今まで見たこともない表情をして2回力強く手を握ると、スーッと目から涙をながし、息を引き取りました」「生きていけるのに、命を奪ってしまうことがどれほど残酷で、大きな悲しみか、皆さん考えたことありますか？ 私は悲しくて何もする気持ちになれませんでした」

用意した文章と、子どもたちの表情を交互に見ながら、米原さんは一人ひとりに語りかけるようにゆっくり話す。伝えたいのは、悲しい経験を重ねる中で思いを巡らせた命の大切さ。妹のお葬式に朗読したお別れの言葉を子どもたちの前で読んだ。

「どうがお父さんと仲良く待っていてください。私たち家族は秋色の絆でつながって

いるから、それを目印にたりつきます」

「父や妹のように世の中に命があります。今の時を迎えたくても迎えることができない人々の分まで、私たちは大切に生きなくてはなりません」

約1時間の話が終わると、子どもたちははいはいの拍手を壇上を送った。米原さんはホッとするような笑顔で子どもたちを見返した。

鯨川小学校5年の吉田咲さんは「妹さんが動けなくなると悲しく思いました。いつもは当たり前前には家族の大切さを感じました」。5年の須藤太君は「妹さんは意識がなくても、家族と心がつながっていたと思う。僕は4人家族。1人でもいなくなったらつらいし、いなくなるとはしらないと思いました」と感想を話した。

米原さんは18日にも、三春町と小野町の中学校で、講演する予定になっている。

## 小5「家族の大切さ感じた」



## 今後の活動予定



12月 3日（木）から15日（火）まで：智頭農林高校でパネル展開催中

12月 6日（日） 「ゼロからの風」上演（米子文化ホール）参加  
終了後なごみの会開催

平成21年

1月23日（土） なごみの会（とっとり被害者支援センター）

2月 1日（月）から末まで：いのちのパネル展を県庁内で開催  
（県庁第2庁舎9階展望室）

島根の江角さんのオブジェも参加

2月27日（土） なごみの会（中部を予定）

3月27日（土） なごみの会（西部を予定）